

本は文化か、馬車か？

自費出版アドバイザー養成講座レポート

中西秀彦氏 講演「本の未来 印刷の未来」を中心に



(株)清水工房 (揺籃社) 山崎領太郎

大阪での開催

長く開花の待たれた桜も盛りを過ぎ、散り際の潔さを私たちに教え始めた4月20日(金)、大阪はモリサワの本社ビルにて「第18回 自費出版アドバイザー養成講座」が開催された。

自費出版アドバイザーとは、本作りに挑戦する著者を的確にサポートし、一定以上の知識を持って自費出版に携わる編集者・営業担当者を養成する資格制度である。2度の受講で受験資格が生じ、1ヶ月間の在宅(在社)試験に挑戦して見事合格すると、晴れて自費出版アドバイザーとして認定される。制度が始まって8年、既に70名を超える有資格者が全国で活躍中だ。

この講座を実質的に運営しているのが「自費出版アドバイザーの会」。全国に散らばるアドバイザーが任意で入会し、年2回の講座運営や専用HPとメーリングリストを使っての情報交換に励んでいる。今回は「本の未来 印刷の未来」と題し、京都の老舗印刷会社、中西印刷(株)の中西秀彦専務(写真内)を招いての講座である。氏は印刷関連の書籍を多数出版しており、最近では『我、電子書籍の抵抗勢力たらんと欲す』(印刷学会出版部)が業界の話題をさらった。今回も電子書籍への言及が講座の大半を占めた。

小さな革命の連続

中西印刷は慶応元年(1865)に創業し、木版、活版、平版、オンデマンドと、常に時代の

変化に即応してきた。中西氏が会社に入ったころは活版の時代。手元を見ずに感覚だけで文選箱へ活字を並べていく恐るべき職人芸が当たり前だった。特段の競争もなく安定はしているが、展望がないと悟った中西氏。電算写植やワープロが登場するや機敏に反応して、新型の機械を積極的に導入してきた。投資が早すぎてもものにならない場合もあったが、こうした先見的なビジネス感覚により、DTP時代となっても慌てずに社業を発展させることができたという。

印刷の変遷をざっと眺めてみると、今般の電子書籍の到来は「グーテンベルク以来の大変革」と大騒ぎするほどのものでもないように思えてくる。印刷業界は電算化という大きな革命を経験し、それを上手に取り込んできた。その後のDTPやオンデマンドの登場もまた、規模は小さくても革命の一種には違いない。そんな変革に臨機応変に対処してきたのだから、電子書籍だけを特別扱いする必要はなく、これまで通り粛々と取り入れていけばよいのではないかと、中西氏の奮戦譚を聞きながら感じた。

編集力が鍵になる

では、中西氏は電子書籍をどう捉えているのだろうか。『我、電子書籍の抵抗勢力たらんと欲す』なる本を出版しているくらいだから、当然、徹底抗戦を試みているだろうと思いきや、どうやらタブレット型端末やスマートフォンの隆盛を目の当たりにして宗旨替えしたようだ。

「ここに変節を宣言します。紙の本のよさは重々承知していますが、大儀のために我が社を犠牲にはできません」と中西氏。“成長分野で勝負せよ”が信条の経営者としての中西氏は、書齋での時間を愛する読書家としての自分を捨て、徹頭徹尾、事業に専心している。それが証拠に、『我、電子書籍の…』を電子書籍化してしまった。軍門?にくだったわけである。

アメリカと日本の事情を比較し、日本でなかなか電子書籍が根付かないのは、日本語の制約の多さに加え、出版社が及び腰なところがあると指摘。これまでの販売形態から脱却できない出版社がコンテンツを提供しないため、これまで電子書籍が広がらずにきた。しかし、タブレットやスマートフォンが拡大し、出版社もいつまでもぐずぐずしてられない情勢になりつつある。国家予算を投入する「出版デジタル機構」も登場し、今後、なし崩し的に電子書籍市場は広がるだろうと中西氏は予測する。

となると、紙の本に未来はないのだろうか？

「デジタルはメッセージのぶちまけ。玉石混濁で無意味な情報や誤った事実が垂れ流されています。これは文化の危機です。それを交通整理するのが、不可逆性を持つ紙の書籍の強み」

紙の本にするという行為が、単に情報を紙へ印字するレベルを越えて、信頼の証明になる時代が来る。そのためにも求められるのが編集力であると中西氏は説く。一朝一夕では獲得できない編集能力こそ、印刷・出版業界がこれからも生き残っていく道ではないかと力説した。

本の未来は？

中西氏の話は実に軽快でユーモアたっぷり。出来のよい講談を聞いているような錯覚にとられるほどで、会場からは終始笑いが絶えなかった。ただし、内容は印刷に携わる者にとってはかなり手厳しかった。

講座のなかでこんな例え話が紹介された。

「本は残りますか?」「残ります。ただし百年前、自動車が登場したころ、『馬車は残りますか?』と問われて、『残ります』と答えるのと同じ意味で」(出版デジタル機構代表取締役・植村八潮氏の話として)

産業としての紙の本は残らず、博物館や資料館に飾られる骨董品としては受け継がれていくだろうと中西氏。筆者は紙の本を愛してはいるが、とって電子書籍を受け容れないわけでもない。端末1つ持っていればいつでもどこでもダウンロードでき、すぐさま読めるなんてこんなに便利な話はない。ただ、本と馬車を同列で捉えるのはどうだろう。本は、一手段にすぎない馬車や自動車とは意味合いが異なるのではないか。思想の種子を撒き、文化の根幹を育み、知性を花開かせる。真に役立つまでに時間のかかる本には、瞬間的に便利な車とは違う特性がある。それを全てデジタルでまかなえるものだろうか。

つい最近読み終えた“紙の”本に次の言葉があった。「本は車輪と同じように、発明された時点で完成されている」(エーコ、カリエール共著『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』阪急コミュニケーションズ)

デジタルの波を避けられないいま、私たち印刷・出版を生業とする人間に大いなる問いが投げかけられているように思う。本を「馬車」と見るか、「文化」と見るか。一度、そこへ立ち戻って考えてみる契機なのではないかと、講座終了直後の大きな拍手を聞きながらつらつらと思いをめぐらした。

×

出席は35名。講座の前に、会場を貸してくださったモリサワさんより、フォント制作の現場とショールーム、MC-BOOKの紹介があった。



日本自費出版ネットワーク
http://www.jsjapan.net/